

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちの祖先は海にすんでいた。何億年も前の私たちの祖先は、魚だったのだ。その魚の一部が陸上に進出して、私たちに進化した。もちろん陸上に進出するためには、体のいろいろな部分を変化させなくてはならなかった。

【図1】の系統樹Aは、脊椎動物から六種（魚類のコイ、両生類のカエル、爬虫類のトカゲ、鳥類のニワトリ、哺乳類のイヌとヒト）を選んで、それらの進化の道すじを示した系統樹である。① 陸上生活に適応する進化的変化はたくさん起きたが、その中の三つを黒い四角で示してある。

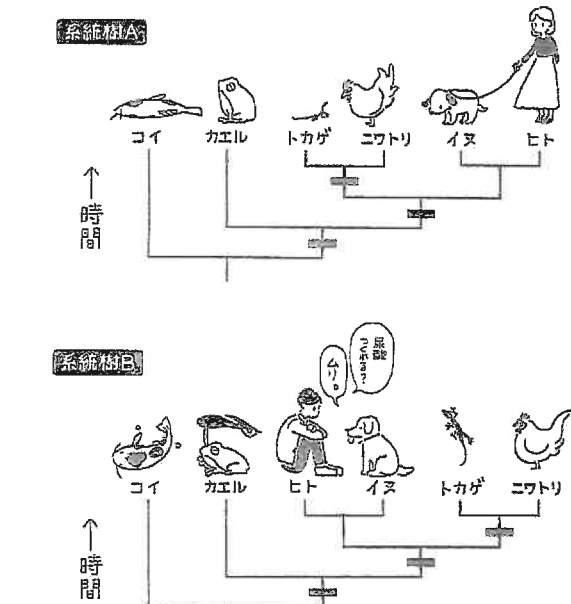
脊椎動物の体はたくさんタンパク質できている。そして古くなったタンパク質は分解されて体の外に捨てられる。タンパク質が分解されると、どうしてもできてしまうのがアンモニアである。

アンモニアは有害な物質なので、体の外に捨てなければならぬ。でも、昔はとくに困らなかった。私たちの祖先は魚類であり、海や川にすんでいたからだ。体のマワりに大量の水があるので、アンモニアを捨てるために水がいくらでも使えたからである。

しかし、陸に上がった両生類には、そういうことができない。陸上には水が少ないので、なかなかアンモニアを捨てられない。でも、アンモニアは有毒なので、あまり体の中に溜めておけない。そこで、とりあえずアンモニアを尿素に作り変えるように進化した。これが系統樹の中の一番下の黒い四角である。尿素も無毒ではないが、アンモニアよりは毒性が低いので、ある程度なら体の中に溜めておくことができるのだ。

それでも両生類は、水辺からあまり離れて生活することができない。その理由の一つは、卵が柔らかくて、すぐに乾燥してしまうからだ。だから、ほとんどのカエルは卵を水中に産む。水辺を離れて生活するためには、つまり、さらに陸上生活に適応するためには、卵が乾燥しない工夫をしなければならぬ。

その工夫を進化させた卵が羊膜卵である（真ん中の黒い四角）。羊膜卵とは、簡単にいうと、羊膜で作った袋の中に水を入れ、その中に胚（発



【図1】二つの系統樹

袋の中の水に、子どもをボチャンと入れておけば、乾燥しないからだ。さらに卵の外側に殻を作って、乾燥しにくくしている。この羊膜卵を進化させた動物は羊膜類と呼ばれ、水辺から離れて生活することができるようになった。この初期の羊膜類から、爬虫類や哺乳類が進化した（間違えやすいが、爬虫類から哺乳類が進化したわけではない）。そしてさらに、爬虫類の一部から鳥類が進化したのである。

爬虫類や鳥類にいたる系統では、さらに陸上生活に適した特徴が進化した。尿素を、尿酸に変えるような進化が起きたのである（一番上の黒い四角）。

尿酸も尿素のように毒性が低い。でも尿酸には、その他にもいいことがある。尿酸は水に溶けにくいので、捨てるときにほとんど水を使わなくていいのだ。

陸上にすんでいる動物にとって、水を手に入れるのは大変なことである。だから、水はなるべく捨てたくない。それなのに、私たちは結構たくさん尿を出して、水をたくさん捨てている。もったいない話である。一方、ニワトリやトカゲは、尿をあまり出さない。ニワトリやトカゲが、イヌみたいに大量の尿を出している姿を見た人はいないはずだ。それは、尿素を尿酸に変える能力を進化させたからである。

つまり、哺乳類は両生類よりも陸上生活に適応しているが、爬虫類と鳥類は哺乳類よりもさらに陸上生活に適応しているのである。

ところで、【図1】の系統樹Aと系統樹Bは、同じ系統関係を表している。しかし、見た目の印象はだいぶ違う。よく目にするのはAのような系統樹だ。これだと、ヒトは進化の最後に現れた種で、一番優れた生物であるかのような印象を受ける。

しかし陸上生活への適応という意味では、Bのような系統樹の方がわかりやすい。トカゲやニワトリの方がヒトより陸上生活に適応しているからだ。系統樹Bを見ると、ニワトリが進化の最後に現れた種で、一番優れた生物であるかのような印象を受ける。

もちろん、進化の最後に現れた種は、ヒトでもニワトリでもない。というか、コイもカエルもヒトもイヌもトカゲもニワトリも、すべて今生きている種だ。だから、みんな進化の最後に現れた種ともいえる。コイもカエルもヒトもイヌもトカゲもニワトリも、生命がタンジヨウしてからおよそ四十億年という同じ長さの時間を進化してきた生物なのだ。そして、陸上生活という点から見れば、この系統樹の中で一番優れた種はトカゲとニワトリなのである。

もしも「走るのが速い」ことを「優れた」というのなら、一番優れた生物はイヌだろう。「泳ぐのが速い」のはコイだろうし、「計算が速い」のはヒトだろう。何を「優れた」と考えるかによって、つまり何を「進歩」と考えるかによって、生物の順番は入れ替わるのだ。

さっきは「陸上生活に適した」ことを「優れた」と考えたが、「水中生活に適した」ことを「優れた」と考えれば、話は逆になる。トカゲは、陸上生活に適した特徴がAしたが、それは水中生活に適した特徴がBしたことを意味する（ちなみにBの反対は、Cではなく

Aである。生物の持つ構造が小さくったり単純になつたりするものがBで、大きくなつたり複雑になつたりするのがAだ。退化も発達も進化の一種である。「水中生活に適した」ことを「優れた」と考えれば、もちろん一番優れた生物はコイになる。

いろいろと考えてみると、客観的に優れた生物というものは、いないことがわかる。陸上生活に優れた生物は、水中生活に劣つた生物だ。走るのに優れた生物は、力に劣つた生物だ。チーターのように速く走るためには、ライオンのような力強さは諦めなくてはならないのだ。

そして、計算が得意な生物は、空腹に弱い生物だ。脳は大量のエネルギーを使う。キカンである。私たちヒトの脳は体重の二パーセントしかないにもかかわらず、体全体で消費するエネルギーの二〇〜二五パーセントも使つてしまう。大きな脳は、どんどんエネルギーを使うので、その分たくさん食べなくてははいけない。もしも飢饉が起きて農作物が取れなくなり、食べ物がなくなれば、脳が大きい人から死んでいくだろう。だから食糧事情が悪い場合は、脳が小さい方が「優れた」状態なのだ。

実際、人類の進化を見ると、脳は一直線に大きくなってきたわけではない。ネアンデルタール人は私たちヒトより脳が大きかったけれど、ネアンデルタール人は絶滅し、私たちヒトは生き残つた【図2】。その私たちヒトも、最近一万年ぐらひは脳が小さくなるように進化している。これらの事実が意味することは、^②脳は大きければ良いわけではないということだ。

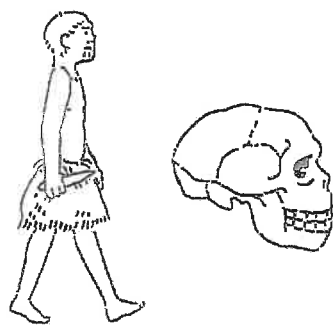
「ある条件で優れている」ということは「別の条件では劣っている」ということだ。したがって、あらゆる条件で優れた生物というものは、理論的にありえない。そして、あらゆる条件で優れた生物がいらない以上、進化は進歩とはいえない。生物は、そのときどきの環境に適応するように進化するだけなのだ。

生物が進化すると考えた人はダーウィン以前にもたくさんいた。でも、チエンバーズもスペンサーも、みんな進化は進歩だと思つていた。^③進化が進歩ではないことを、きちんとしてしたのは、ダーウィンが初めてなのだ。それではダーウィンは、なぜ進化は進歩でないと気づいたのだろうか。進化が進歩ではないとダーウィンが気づいた理由は、生物が自然選択によつて進化することを見つけたからだ。ここで間違えやすいことは、自然選択を発見したのはダーウィンではないということだ。ダーウィンが発見したのは「自然選択」ではなくて「自然選択によつて生物が進化すること」だ。

自然選択について簡単に説明しておこう。自然選択は二つの段階から成る。

一つ目は、遺伝する変異（遺伝的変異）があることだ。走るのが速い親に、走るのが速い子どもが生まれる傾向があれば、走る速さの違いは遺伝的変異である。一方、トレーニングで鍛えた筋肉は子どもに伝わらないので、それは遺伝的変異ではない。

二つ目は、遺伝的変異によつて子どもの数に違いが生じることだ。つまり、走るのが遅い個体



【図2】ネアンデルタール人

より、走るのが速い個体に子どもがたくさんいる場合などだ。ここでのいう子どもの数は、単に生まれる子どもの数ではない。生まれた後にどのくらい生き残るかも、考えに入なくてはならない。具体的には、親の年齢と子どもの年齢を同じにして数えればよい。たとえば、親の数を二十五歳の時点で数えたら、子どもの数も、二十五歳まで生き残つた子どもで数えればよいのだ。この二つの段階を通れば、子どもの数が多くなる遺伝的変異を持つた個体が、^④自動的に増えていく。考えてみれば、自然選択なんて簡単だ。要するに、走るのが速いシカより、走るのが遅いシカの方が、ヒョウに食べられて減っていくということだ。そんなこと、誰だつて気づくだろう。実際、その通りで、『種の起源』が出版される前から、生物に自然選択が働いていることは常識だった。当時、進化に興味がある人なら、誰だつて知つていた。それなのに、どうしてダーウィンが自然選択を発見したように「ゴカイ」されているのだろうか。

実は、自然選択はおもに二種類に分けられる。安定化選択と方向性選択だ。

安定化選択とは、平均的な変異を持つ個体が、子どもを一番多く残す場合だ。たとえば、背が高過ぎたり、反対に背が低過ぎたりすると、病気になるやすく子どもを多く残せない場合などだ。この場合は、中ぐらひの背の個体が、子どもを一番多く残すことになる。つまり安定化選択は、^Iのである。

一方、方向性選択は、極端な変異を持つ個体が、子どもを多く残す場合だ。たとえば、背が高い個体は、ライオンを早く見つけられるので逃げのびる確率が高く、子どもを多く残せる場合などだ。この場合は、背の高い個体が増えていくことになる。このように方向性選択は、^{II}のである。

ダーウィンが『種の起源』を出版する前から、安定化選択が存在することは広く知られていた。つまり当時は、自然選択は生物を進化させない力だと考えられていたのである。ところが、ダーウィンはそれに加えて、自然選択には生物を進化させる力もあると考えた。ダーウィンは、方向性選択を発見したのである。

方向性選択が働けば、生物は自動的に、ただ環境に適応するように進化する。たとえば気候が暑くなつたり寒くなつたりを繰り返すとしよう。その場合、生物は、暑さへの適応と寒さへの適応を、何度でも繰り返すことだろう。生物の進化に目的地はない。目の前の環境に、自動的に適応するだけなのだ。こういう進化なら明らかに進歩とは無関係なので、進化は進歩でないとダーウィンは気づいたのだろう。

地球には素晴らしい生物があふれている。小さな細菌から高さ一〇〇メートルを超す巨木、豊かな生態系をはぐくむ土壌を作る微生物、大海原を泳ぐクジラ、空を飛ぶ鳥、そして素晴らしい知能を持つ私たち。こんな多様な生物を方向性選択は作り上げることができるとだ。もしも進化が進歩だつたり、世界が「存在の偉大な連鎖」だつたりしたら、つまり一直線の流れしかなかったら、これほどみごとな生物多様性は実現していなかっただろう。私たちが目にしている^⑤地球上の生物多様性は、「存在の偉大な連鎖」を越えたものなのだ。

（更科 功『若い読者に贈る美しい生物学講義―感動する生命のはなし』より）

問1 — 線 a～d のカタカナを漢字で書きなさい。

問2 — 線①「陸上生活に適應する進化的変化」についての説明として、「ヒト」の進化の過程にもあてはまるものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 有害なアンモニアを尿素より毒性の低い尿酸に作り変えることで水辺から離れることができるようになり、胚を羊膜卵により乾燥から防げるようになった。
- 2 有害なアンモニアを尿素により完全に無毒化し、羊膜卵の外側に殻を作ることによって胚を乾燥から守り、より水辺から離れて生活できるようになった。
- 3 有害なアンモニアを尿素に作り変えることでより毒性を弱め、水中に卵を産む代わりに羊膜卵によって乾燥から胚を守ることができるようになった。
- 4 有害なアンモニアを尿酸に作り変えることで尿の排出にほとんど水をつかわなくて済むようになり、羊膜卵によって胚の乾燥を防げるようになった。

問3 空らん A C には「進化」「退化」「発達」のいずれかのことが入ります。その組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | |
|--------|------|------|--------|------|------|
| 1 A…進化 | B…退化 | C…発達 | 2 A…発達 | B…退化 | C…進化 |
| 3 A…退化 | B…退化 | C…進化 | 4 A…発達 | B…進化 | C…退化 |

問4 — 線②「脳は大きければ良いわけではない」が表していることとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 脳が小さい方が食糧事情の影響を受けにくいということ。
- 2 脳が大きくなると陸上生活に支障をきたすということ。
- 3 脳が小さいほど運動能力が発達しているということ。
- 4 脳が大きくなるとさらなる進歩を遂げることが困難だということ。

問5 — 線③「進化が進歩ではないことを、きちんと示したのは、ダーウィンが初めてなのだ」とありますが、それまでと異なりダーウィンは進化についてどのように考えたのですか。文中から二十二字でぬき出し、はじめと終わりの四字で答えなさい。

問6 — 線④「自動的に増えていく」とありますが、その例として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 遺伝的に遠くが見える目を持った個体が、外敵の攻撃を避けながら、結果として多くの個体を残していく。
- 2 遺伝的に多くの子どもを産める個体ほど、生存競争に有利なため、結果として多くの個体を残していく。
- 3 遺伝的に小さな体型の個体でさえ、別の特徴を持った個体と共存し、結果として多くの個体を残していく。
- 4 遺伝的に走ることが苦手な個体でも、敵から身を守る方法を習得し、結果として多くの個体を残していく。

問7 空らん I II に入ることはとして最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 生物を変化させるように働く | 2 生物を進歩させるように働く |
| 3 生物を変化させないように働く | 4 生物を進歩させないように働く |

問8 — 線⑤「地球上の生物多様性は、『存在の偉大な連鎖』を越えたものなのだ」とありますが、それはどういうことですか。本文全体の内容をふまえた上で、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 生物の多様性は、自然選択という平均的な変異をくりかえす単純・下等な生物がより多くの子どもを残すことでもたらされたということ。
- 2 生物の多様性は、単純・下等な生物が環境の変化に応じて複雑・高等な生物へと直線的に進化することでもたらされたということ。
- 3 生物の多様性は、生物の中でより単純・下等なものは滅び、生き残ったものが必然的に複雑・高等なものばかりとなる進歩をとげることでもたらされたということ。
- 4 生物の多様性は、単純・下等から複雑・高等へと生物が進歩を続けてきた結果ではなく、それぞれの生物が環境に適應するために進化を繰り返すことでもたらされたということ。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

青年の時は、だれでもつまらないことに熱情をもつものだ。

その頃、地方のある高等学校にいた私は、毎年初夏の季節になると、きまつて一つの熱情にとりつかれた。それは何でもいつまらぬことで、^①ある私の好きな夏帽子を、被^{かぶ}つてみたいという願^{ねが}いである。その好きな帽子というのはパナマ帽でもなくタスカンでもなく、あの海老茶色^{えびちいろ}のリボンを巻いた、[※]一高の夏帽子だったのだ。

どうしてそんなにまで、あの学生帽子が好きだったのか、自分ながらよく解^{わか}らない。多分私は、その頃愛読した森鷗外氏の『青年』や、夏目漱石氏の学生小説などから一高の学生たちを連想し、それが初夏の青葉の中で、上野の森などを散歩している、彼等^{かれら}の夏帽子を [※]表象させ、連想心理に結合したためであろう。

とにかく私は、あの海老茶色のリボンを考え、その書生帽子を思うだけでも、ふしぎになつかしい独逸^{ドイツ}の戯曲[※]、アルト・ハイデルベルヒを連想して、夏の青葉にそよいでくる海の郷愁を感じたりした。

その頃私のいた地方の高等学校では、真紅色^{しんくしよく}のリボンに二本の白線を入れた帽子を、一高に準じて制定していた。私はそれが厭^{いや}だったので、白線の上に赤インキを塗りつけたり、真紅色の上に紫絵具^{むらさかえのぐ}をこすつたりして、無理に一高の帽子に紛^{まぎ}らしていた。だがとうとう、熱情が押えがたくなつてきたので、ある夏の休暇^{きゅうか}に上京して、本郷の帽子屋から、一高の制定帽子を買つてしまつた。

しかしそれを買つた後では、つまらない悔恨^{かいこん}にくやまされた。そんなものを買つたところで、実際の一高生徒でもない自分が、まさか気恥^{きは}ずかしく、被^かつて歩くわけにもいかなかったから。

私は人のいないところで、どこか内証^{ないしよ}に帽子を被り、鷗外博士の『青年』やハイデルベルヒを連想しつゝ、自分がその主人公である如く、空想裏^{くうそうり}の悦楽^{えつらく}に耽^{ふけ}りたいと考えた。その強い欲情は、どうしても押えることができなかった。そこで、ある夏、七月の休暇になると同時に、ひそかに帽子を [※]行李^{りょうり}に入れて、日光の山奥^{やまおく}にある中禅寺の避暑地^{ひしよち}へ行^いつた。^②もちろん宿屋は、湖畔^{こはん}のレーキホテルを選定した。それは私の空想裏に住む人物としても、当然選定さるべきの旅館であつた。

ある日私は、付近の小さな滝を見ようとして、一人で夏の山道を登つていった。七月初旬^{しよじゆん}の日光は、青葉の葉影^{はかげ}で明るくきらきらと輝^{かがや}いていた。

私は宿を出る時から、思い切つて行李の中の帽子を被つていた。こんな寂しい山道では、もちろんだれも見ることがなく、気恥^{きは}ずかしい思いなしに、勝手な空想に耽^ふれると思つたからだ。夏の山道には、いろいろな白い花が咲^さいていた。私は書生袴^{ぶかま}に帽子を被り、汗ばんだ皮膚^{ひふ}を感じながら、それでも右の肩を高く怒^{いか}らし、独逸学生^{どいつがくせい}の青春氣質^{せいしん}を表象する、あの浪漫的^{ろうまん}の豪壮^{こうそう}を感じつつ歩いていった。^A懐中^{かいちゆう}には丸善で買つたばかりの、なつかしいハイネの詩集が入っていた。その

詩集は索引^{さくいん}の鉛筆^{えんぴつ}で汚^{よご}されており、所々に凋^{しお}れた草花などが押^おされていた。

山道の行きつめた崖^{がけ}を曲つた時に、ふと私の前に歩いていく、二個の明るいパラソルを見た。たしかに姉妹^{しまい}であるところの、美しく若い娘^{むすめ}であつた。私は何の理由もなく、急に足がすくむようなはずかしさと、一人でいるきまりの悪さを感じたので、歩調を早めながら、わざと彼等の方を見ないようにし、特別にまた肩を怒^おらして追^おいぬけた。どんな私の様子からも、彼等に対して無関心でいることを装^{よそわ}おうとして、無理な努力から固^{かた}くなつていた。そのくせ内心では、こうした人氣のない山道で、美しい娘等と道づれになり、一口でも言葉を交^{まじ}わえられることの悦^{よろこ}びを感じ、空想の有り得^あべき幸福の中でもじもじしながら。

私は女等を追^おい越^こしながら、こんな絶好の場合に際^きして機会^{チャンス}を捕^{とら}えなかつたことの愚^ぐを心に悔^くいた。

だが丁度その時、偶然^{ぐうぜん}のうまい機会が来た。私が汗をぬぐおうとして、ハンケチで額の上をふいた時に、帽子が頭からすべり落ちた。それは輪のように転^まがっていつて、すぐ五六歩後から歩いてくる、女たちの足許^{あしもと}に止^{とど}まつた。若い方の娘が、すぐそれを拾^{ひろ}つてくれた。彼女は恥^はじる様子もなく、快活に私の方へ走^{はし}つてきた。

「どうも……どうも、ありがとう。」

私はどぎまぎしながら、やつと口の中で礼を言^いつた。そして急いで帽子を被^かり、逃^にげ出すようにすたすたと歩き出した。宇宙が真赤^{まっか}に回転^{まわ}して、どうすればいいか解^とけなかつた。ただ足だけが機械的に運動^{うご}して、むやみに速足で前へ進^{すす}んだ。

だがすぐ後の方から、女の呼びかけてくる声を聞いた。

「あの、おたずねいたしますが……」

それは姉の方の娘であつた。彼女はたしかに、私よりも一つ二つ年上に見え、[※]伶俐^{れいり}な美しい瞳^めをした女であつた。

「滝の方へ行くのは、この道でいいのでしょうか？」

そう言^いつて慣^なれ慣^なれしく微笑^{びしょう}した。

^③「はあ！」

私は窮屈^{きうくつ}に四角^{しかく}ばつて、兵隊のような返事をした。女は暫^{しば}らく、じつと私の顔を眺^{なが}めていたが、やがて世慣^{よぐわん}れた調子で話しかけた。

「失礼ですが、あなた一高のお方ですね？」

私は一寸返事^{ちよつし}に困^こつた。

「いいえ」という否定の言葉が、直ちに瞬間^{しゆんかん}に口に浮^うかんだ。けれども次の瞬間には、帽子のこゝとが頭に浮^うかんで、どきりと冷汗を流^{なが}してしまつた。私は考える余裕^{よゆう}もなく、混乱^{こんらん}して曖昧^{あいまい}の返事をした。

^④「はあ！」

「すると貴方^{あなた}は……」

女は浴びせかけるように質問した。

「秋元子爵の御子息ですね。私はよく知っていますわ。」

私は今度こそ大きな声で、はつきりと返事をした。

「いいえ。ちがいます。」

けれども女は、なお疑い深そうに私を見つめた。ある理由の知れないはにかみと、不安な懸念とにせき立てられて、私は女づれを後に残し、速足でずんずんと先に行ってしまった。

私がホテルに帰った時、偶然にもその娘等が、隣室の客であることを発見した。彼等はその年老いた母と一緒に、三人でここに来ていた。いろいろな反復する機会からして、避けがたく私はその女づれと懇意になった。遂には姉娘と私だけで、森の中を散歩するような仲にもなった。その年上の女は、明らかに私に恋をしていた。彼女はいつも、私のことを『若様』と呼んだ。

私は最初、女の無邪気な意地悪から、悪戯に言うのだと思ったので、故意と勿体ぶった様子などして、さも貴族らしく返事をした。だがある時、彼女は真面目になって話をした。ずっと前から、自分は一高の運動会やその他の機会で、秋元子爵の令息をよく知ってること。そして私こそ、たしかにその当人にちがいがなく、どんなにしらばくれて隠していても、自分には解ってるということ、女の強い確信で主張した。

その強い確信は、私のどんな弁駁でも、撤回させることができなかった。しまいには仕方がなく、私の方でも好加減に、華族の息子としてふるまっていた。

最後の日が迫って来た。

かなかな蟬の鳴いてる森の小路で、夏の夕景を背に浴びながら、女はそつと私に近づき、胸の秘密を打ち明けようとする様子が見えた。私はその長い前から、自分を偽っている苦悩に耐えなくなっていた。自分は一高の生徒でもなく、いわんや貴族の息子でもない。それに図々しく制帽を被り、いい気になって『若様』と呼ばれている。どんなに弁護して考えても、私は不良少年の典型であり、彼等と同じ行為をしているのである。

私は悔恨に耐えなくなった。そして一夜の中に行李を調べ、出発しようと考えた。

翌朝早く、私は裏山へ一人で登った。そこには夏草が繁っており、油蟬が木立に鳴いていた。

私は包から帽子を出し、双手に握ってむしり切った。

麦藁のべりべりと裂ける音が、不思議に悲しく胸に迫った。そのでさえも、地面の泥にまみれ、私の下駄に踏みつけられていた。

（萩原朔太郎『夏帽子』全文）

〈なお、問題を作成するにあたり、かなづかいと用字を改めました。〉

※一高……旧制第一高等学校。東京大学教養学部の前身であり、当時の学生の憧れの存在であった。

※表象……象徴。イメージ。

※戯曲……演劇の脚本形式で書かれた文学作品。

※行李……旅行用の荷物入れ。

※怜悯……頭の働きがすぐれていてかしこいこと。

※弁駁……他人の説が間違っていると攻撃して言いやぶること。

問1——線A「懷中」、B「懇意」、C「いわんや」の意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

A「懷中」	1 着物の中	2 カバンの中
	3 思い出の中	4 帽子の中
B「懇意」	1 相席	2 恋愛関係
	3 親しい間柄	4 険悪な関係
C「いわんや」	1 絶対に	2 また
	3 ただ	4 まして

問2——線①「ある私の好きな夏帽子を、被ってみたいという願いである」とありますが、「私」はこの夏帽子が好きな理由をどのように自己分析していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 憧れの一高生の夏帽子に見立てて自分の高校の学生帽を身につけてみたけれども、熱情を満たせなかったため。
- 夏の青葉や海の郷愁を感じるたびに一高生の姿が思い出され、彼らの象徴的な夏帽子が真つ先に思い浮かんだため。
- 独逸の戯曲を読むことで夏の一高生の姿や彼らの帽子を連想し、なつかしさや夏の清らかさを感じたため。
- 一高生の夏帽子は、自分が好んで読んでいる小説やそこに登場する人物とその情景を思い起こさせるものだと感じたため。

問3 ―線②「もちろん宿屋は、湖畔のレーキホテルを選定した」とありますが、どうして「私」は「もちろん」レーキホテルを選んだのですか。文脈から「レーキホテル」がどのようなホテルであるかを考えた上で、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 人の目を気にしなくていい場所にあるだけでなく、「私」が負い目と高揚感の両方を隠して泊まるには一番ふさわしいホテルだと思ったから。

2 人の目を気にしなくていい場所にあるだけでなく、「私」が憧れる作品の主人公のような人物であれば、選ぶであろうホテルだと思ったから。

3 つまらない悔恨をいやしてくれる場所であるだけでなく、「私」が一高生を装った場合にもっとも色々な人と出会えるホテルだと思ったから。

4 つまらない悔恨をいやしてくれる場所であるだけでなく、「私」が憧れる一高生が宿泊する場所としては日光で唯一のホテルだと思ったから。

問4 文中の▼印から▲印までの間で姉妹と出会った「私」の気持ちの高ぶりを隠喩(暗喩)を用いて表現している部分があります。この部分を十字以内でぬき出しなさい。

問5 ―線③・④「はあ！」とありますが、その説明として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

1 ふてくされた気持ちがかもった返事としての「はあ！」

2 内容がよくわからないことに対しての疑念の「はあ！」

3 緊張して余裕がないなかで肯定しようとした「はあ！」

4 相手に好意を表現するための親愛の情を示す「はあ！」

5 自身の思いが相手に通じなくてやりきれない「はあ！」

6 返答が明確にまともでない中でとっさに出た「はあ！」

問6 ―線⑤「私は女づれを後に残し、速足でずんずんと先に行ってしまった」とありますが、どうして「私」はこのようにしたのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 美しい女性に興味を持たれたことへのはずかしさに加えて、これ以上彼女たちに関わっている则自分の素性が明らかになってしまうことへのおそれがあったから。

2 美しい女性と関わり合いが持てたことはうれしく思う一方で、自身のついた嘘が彼女たちに確実に悟られてしまうと感じわずらわしくなったから。

3 美しい女性と知り合えて楽しい気持ちも感じてはいたが、これ以上彼女たちに関わっていると自分の本来の目的が果たせなくなってしまうそうで憂鬱に感じたから。

4 美しい女性が自分のことを疑いのまなざしで見ていることを苦々しく思った上に、今後一高生の帽子をかぶっていることを馬鹿にされると思い悔しくなったから。

問7 ―線⑥「令息」とありますが、この時の「令」の漢字の意味として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 お金持ちの 2 指示される 3 立派な 4 平和な

問8 空らん□にあてはまることばを文中より八字でぬき出しなさい。

問9 この文章から読み取れる「私」の心情や行動の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 「私」は当初、夏帽子をかぶることによって一高生の気分ひたりひそかな満足感を味わっていたが、道づれになった女性の勘違いをきっかけとして、満足感がだんだんと罪悪感へ変わっていったために、夏帽子を破ってしまった。

2 「私」は当初、夏帽子をかぶることによって一高生として振舞うことができると思っていたが、道づれになった女性の勘違いをきっかけとして、自分は一高生としての資格がないことに気づき、夏帽子を憎く思うようになった。

3 「私」は当初、夏帽子をかぶることによって一高生になりきって大いに満足していたが、道づれになった女性の勘違いをきっかけとして、逆に帽子だけでは人をひきつけ続けられないと気づき、夏帽子を泣く泣く手放すこととした。

4 「私」は当初、夏帽子をかぶることによって一高生の雰囲気ひたって気持ちよく過ごしていたが、道づれになった女性の勘違いをきっかけとして、逆に夏帽子がなければ旅を楽しむことができたと思い、八つ当たりをしてしまった。

3 次の【A】～【I】の作品にはすべて「雪」が出てきます。これらを読んで、後の問いに答えなさい。

【A】

幼 年 時

私の上に降る雪は

真綿のようでありました

少 年 時

私の上に降る雪は

霰みぞれのようでありました

十 七 ー 十 九

私の上に降る雪は

霰あられのように散りました

二 十 ー 二 十 二

私の上に降る雪は

電ひょうであるかと思われた

二 十 三

私の上に降る雪は

ひどい吹雪ふぶきとみえました

二 十 四

私の上に降る雪は

※ いとしめやかになりました……

(中原中也「生おい立ちの歌 I」)

※ いと……とても。

【B】

太郎を眠ねむらせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

(三好達治「雪」)

【C】 田子の浦にうち出でてみれば白妙しろたえの富士の高嶺たかねに雪は降りつつ 山部赤人

【D】 朝ぼらけありあけの月と見るまでに吉野の里にふれる白雪 坂上是則

【E】 いざさらば雪見にころぶ所まで 松尾芭蕉

【F】 いくたびも雪の深さを尋ねけり 正岡子規

【G】 雪残る頂ひとつ国境 正岡子規

【H】 雪の夜の紅茶の色を愛しけり 日野草城

【I】 ゆきふるといひいばかりの人しづか 室生犀星

問1 【A】のような詩の形式を何といいますか。次から一つ選び、番号で答えなさい。ただし、「幼年時」のような小見出しは考えに入れないものとします。

- 1 文語定型詩 2 文語自由詩 3 口語定型詩 4 口語自由詩

問2 【A】について、「私」の身の上の変化を説明したものととして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「私」は幼年時からどの年代でも幸福とはいえない身の上であった。
2 「私」は成長するにしたがってしだいに不幸になりつつづけていった。
3 「私」は少年時から困難を背負ったが二十代半ばでやや落ち着いた。
4 「私」は幸福な時期と不幸な時期を何度もくりかえす生活を送った。

問3 【B】で使われている表現技法として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 体言止め 2 倒置法 3 擬人法 4 対句法

問4 【C】と【D】はともに、藤原定家が飛鳥時代から鎌倉時代までの名歌を選んで編んだ歌集に収められている歌です。その歌集の名前（通称）を漢字四字で答えなさい。

問5 【E】～【I】の中で、よまれた季節が一つだけ異なるものがあります。その記号と、よまれた季節を春夏秋冬の漢字一字で答えなさい。

問6 次の①～③は、【C】～【I】のいずれかについて説明したものです。どれについてのものか考え、それぞれC～Iの記号で答えなさい。

① 作者は病気をわずらっており、思うように外出できない中でよまれた作品。作者のもどかしさがよくあらわれている。

② 作者の動きとともに雄大な景色が目の前にひらけていく印象の作品。字あまりが独特のリズム感を生み出している。

③ 家の中で女性と二人で対面している場面をよんだ作品といわれている。特徴のある表記法がやさしさを生んでいる。

問7 「雪」という漢字の部首名をひらがなで書きなさい。

問8 次の①～③の文について、「雪」を使ったことばの使い方が正しいければ○、あやまっていれば×で答えなさい。

① 「ほたるの光、窓の雪」という歌詞のとおり、かれはまずしいながらもけんめいに働く少年時代を送った。

② 母はしんの強さだけでなくしなやかで人あたりがよいという一面がある、柳に雪おれなしという人物だ。

③ A国とB国の首脳が会談した結果二人の主張は平行線となり、両国の関係は歴史的雪どけにおちいった。

